

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(一)

武藤 明 範

序論

筆者は、この数年間、漢魏六朝時代の中国仏教界では、どのような葬送が行われていたかを明らかにすることを目的として、『梁高僧伝』を用いて、高僧の臨終ないし葬送の様子を考察し、当時の高僧の葬送観を研究している。^①

慧皎(四九七―五五四)の「梁高僧伝序」によれば、^②『梁高僧伝』は、後漢の永平十年(六七)から梁の天監十八年(五一九)に至る高僧の伝記を、訳経・義解などから成る十篇として収め、伝記を載せる本伝の僧は二五七名であり、名前を載せる付見の僧は二百余名とある。

『梁高僧伝』にみられる高僧の臨終時の様子や葬送の様

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(一)(武藤)

子については、先学の優れた研究成果があり、多くの教授を受けている。^③ 筆者は、先学の研究に基づいて、『梁高僧伝』全十篇にみられる高僧の行実を検討した結果、従来最も多くの高僧の葬送を指摘している田中純男氏の二九人よりも多い、六十人近くの臨終時や葬送に関する行実を確認することができた。^{④⑤}

前回の考察では、釈尊当時の教団ではどのような葬送が実施されていたかや、『梁高僧伝』に記載する外国僧や中国僧の火葬の様子や実施された背景について考察した。その中で明らかになったことを整理すると、次の①～③のようである。

①インドでは古来より、様々な葬送が行われていたが、

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(一)(武藤)

釈尊当時には一般的に、風葬を実施することが多かったようである。

⑥ 仏教教団では最初、風葬を実施していたが、途中から火葬を行うようになり、以後、その風習は、七世紀までは続いたことが分かった。

⑦ 古来より中国では、土葬が主流であったため、『梁高僧伝』によれば、火葬を行った僧は十二人と少なかった。

その内訳を記せば、外国僧は求那跋摩(三七七―四三二)・羅什(三四四―四一三・三五〇―四〇九)・法朗(生没年未詳)の三人であった。中国僧は、智嚴(生没年未詳)・法琳(生没年未詳)・道汪(?―四六五)・僧生(生没年未詳)・賢護(?―四〇一)・訶羅竭(?―二九八)・朱土行(?―二六〇―?)・普恒(四〇一―四七九)の八人であり、出身地不明の僧は竺道嵩(生没年未詳)の一人であった。

今回の論攷では、『梁高僧伝』にみられる全ての高僧の臨終や葬送の様子を取り上げて考察するのは、紙幅の都合上難しいので、筆者が調べてみて手応えのあった、外国人僧と出身地不明の僧の土葬に限定して、そこにみられる背

景や意義について検討する。具体的には、『梁高僧伝』にみられる葬送の形式が不明なものから、高僧の臨終時の様子やその後の祀り方について明らかにする。続いて、『梁高僧伝』に記す外国僧と出身地不明の僧の土葬の様子や実施された背景や意義を明らかにしたい。

本論 『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察

第一節 『梁高僧伝』にみられる葬送の形式が不明

なもの

『梁高僧伝』は、高僧の行実を明らかにすることを目的として編纂されたため、僧侶の最期は「卒」や「命終」と記すことが多く、「葬」や「荼毘」などと表記するのは少ない。このため高僧が、どのような形で弔われたかを知ることが難しい。しかし、限られた記述から葬送の形態を大別すると、「火葬」「土葬」「風葬」の三種に区分することができる。中には葬送を行った後に、「碑」や「寺」などを建立して高僧の遺徳を讃える場合もある。また、高僧の臨終または入滅時の様子に注目すると、高僧が長い間、坐禅や懺法を修行実践した影響からか、高僧は自らの死を予

見することや、指を曲げて自らが到達した修行の境地を表現することや、身体から特別な香りを出すことや、蟬の抜け殻のように亡くなったという記述を散見する。伝記では、これらの事例を個々に記すものもあれば、一つの伝記中に二・三の要素を含むものもある。

本論では、土葬を行った外国僧と出身地不明の僧の事例を考察するが、その前に、伝記からは葬送の形式を特定できないが、僅かの記述から、高僧の臨終時や葬送の様子を明らかにしたい。本節では、帛遠(生没年未詳)・求那跋陀羅(三九四―四六八)・竺法義(三〇六―三八〇)・智秀(生没年未詳)・法匱(生没年未詳)・僧翼(三九四―四五〇)、曇鹽(生没年未詳)・衛思度(生没年未詳)・曇徽(三二二―三九五)・僧濟(生没年未詳)・法和(生没年未詳)・僧光(二八六―三九六)の十二人の臨終時や葬送時や葬送後の様子などを検討する。

帛遠伝によれば、仏道教化において陝西省と甘肅省で名声を博した河南省出身の帛遠は、秦州(甘肅省天水)刺史の張輔(生没年未詳)から家臣になることを勧められた。しかし彼は、これを辞退するために張輔に害せられた。

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(一)(武藤)

その後、張輔の部下であった富整(生没年未詳)が、張輔を斬首すると、人々は帛遠の屍を分けて、各地に塔廟を建立したという。

すなわち十方の諸仏を呼ぶらく、「(法)祖、前身の罪縁歡喜もて対を竟る。願わくはこれより以後、(張)輔の善知識となり、殺人の罪を受けしむることなからん」と。遂にすなわちこれを鞭つこと五十、奄然として命終す。(張)輔、後具さにそのことを聞き、まさになに怨恨せり。初め(法)祖の道化の声、関隴を被ふや峭函の右、これを奉ずること神のごとし。戎晋嗟慟して行路涕を流す。隴上の羌胡、精騎五千を率い、將に(法)祖を迎えて西帰せんと欲す。中路にしてその害に遇うを聞き、悲恨及ばず。衆みな憤激して、(法)祖の讎を復さんと欲す。(張)輔、軍を上隴に遣り、羌胡輕騎を率いて逆に戦う。時に天水の漲下督富整、遂に因りて忿りて(張)輔を斬る。群胡既に怨恥を雪ぎ善と称して還り、共に(法)祖の屍を分ちて、各塔廟を起てぬ。

伝記には、五十回に及ぶ鞭打ちによって死罪となった帛

遠の葬送がどのように行われたかの記述がない。しかし、後に人々が墓場から屍を取り出し分けて、各地に塔を建立したとあるのは、帛遠が尊敬されていたことを示していると考えられる。

求那跋陀羅伝によれば、建康(江蘇省南京)で『雜阿含經』などを訳出し、宋の太宗(在位四六五―四七二)などから寵愛を受けて、七十五歳で亡くなった中インド出身の求那跋陀羅の臨終時と葬送の様子は、次のようである。

太宗の世に至り、礼供弥隆す。大(秦)始四年正月に到り、体の不念なるを覚え、すなわち太宗および公卿等と別を告ぐ。臨終の日、延佇してこれを望むに、天華の聖像を見る。禺中遂に卒す。春秋七十有五年。太宗深く痛惜を加え、慰贖甚だ厚く、公卿葬に會して、栄哀備はれり。

秦始四年(四六八)の正月に体調の不快を感じた求那跋陀羅は、太宗などに別れを告げた。臨終の際には、首を伸ばして遠くを望むと、天華と聖像が見えて、正午前には亡くなった。太宗は、痛惜の念を深く表して弔慰の品々は手厚く、葬礼には多くの公卿が列席したという。伝記からは、

葬送がどのような形式で行われたか不明であるが、人々から慕われた彼の葬送は盛大であったと推察できる。また、亡くなった時刻に関して、伝記には正午近くの「禺中」であったとある。吉川忠夫氏が指摘するように、『梁高僧伝』や『神仙伝』などの史伝類には僧侶や道士が、太陽が正中する正午前後に「入滅」や「仙去」したという記述が随所であり、中国では、宗教者が正午に逝去するのは特別な意味があったという。従って、求那跋陀羅伝に禺中に亡くなったとある記述を、史実と考えるのは早計であろう。法義伝によれば、出身地は不明であるが、『法華経』に精通し始寧(浙江省上虞県)の保山や建業(江蘇省南京)で講義を行った法義の葬送後の様子を次のように記す。

晋の寧康三年、孝武皇帝、使を遣わして徵請す。都に出でて講説す。晋の太元五年、都に卒す。春秋七十有四なり。帝、錢十万をもつて新亭崗を買ひて、墓とし塔三級を起こす。(法)義の弟子曇爽、墓所に寺を立て、よりて新亭精舎と名づく。後、宋の孝武、南下して凶を伐ちしが、變施至止して、宮をこの寺に式す。登禪するにおよんで、また禪堂に幸す。よりてた

めに開拓して、改めて中興(寺)という。故に元嘉の末の『童謡』にいわく、「錢唐は天子に出づ」と。すなわち禪堂の謂なり。故に中興禪房に、なお龍飛殿あり。今の天安これなり。¹⁰⁾

伝記からは、七十四歳で亡くなった法義の葬送がどのような形式で行われたか不明である。しかし以下に記すように、法義を祀るための墓や塔や寺が造られた経緯や、また寺と朝廷との関係を知ることができる。東晋の孝武帝(在位三七二―三九六)は、法義のために十万錢をもって新亭崗を買って墓を造り、三層の塔を建立した。法義の弟子であった曇爽(生没年未詳)は、師の墓に寺を立て、地名にちなんで新亭精舎と名づけた。後に、南朝の宋の孝武帝(在位四五三―四六四)が、長江を南下して元凶を討伐する際には、天子の乗り物である車駕しゃがが到着するとこの寺を行宮とした。また孝武帝が即位する際には、再び禪堂に行幸して、その時に寺の伽藍を広げて中興寺と改名した。それ故に、宋の元嘉(四二四―四五三)の末の童謡には、「錢唐に天子を出す」とあり、それは禪堂の意味であるという。また中興寺の禪房には、皇帝が即位する場所である

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(一)(武藤)

龍飛殿があり、現在の天安寺がこれに該当するという。

船山徹氏らが指摘するように¹¹⁾、中興寺は孝武帝が重視した寺であり、『梁高僧伝』の釈道温伝によれば、大明四年(四六〇)には、孝武帝の生母である路昭皇太后(生没年未詳)が禪房に僧を招き、齋会を行う寺院であった。

孝建の初め、勅を被りて都に下り、中興寺に止まる。大明中、勅して都邑の僧主となす。路昭皇太后、大明四年十月八日、普賢の像を造りて成る。中興(寺)の禪房において齋を設く。請ずるところ、凡そ二百僧、名を列ねて同じく集まり、人数已に定まる。時に寺既に新たに構えて、嚴衛甚はだ肅つづしむ。忽たちまち一僧あり。晩に來たりて座につき、風容すべて雅たちまなり。堂をあげて目を瞞す。齋主と共に語る。百余許言、忽ちまぢ見えず。防門を檢問するに、みな言う。「出入を見ず」と。衆たちまぢそれ神人なるを悟る。(道)温時に既に僧主たり。たちまぢ秣陵に列言していわく。「皇太后、歡えい鑿かん沖明にして、聖符幽洽なり。思を淨場に滌あい、衿を至境に研とぐ。固に声、宸内に藻に、事、梵表に虚なるをもつて、たちまぢ鎔よう斷を創思し、神華

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(二)(武藤)

を棲写して、普賢菩薩の盛像を模造す。宝、宙珍を傾け、妙、天節を尽くす。設ける所の齋講は、今月八日に訖わり、囀会限りあり。名簿素定り、次を引いて席につき、数に盈減なし。転経まさに半ならんとし、景、毘吾に及び、たちまち異僧の座内に預かるを見る。容止端嚴にして、氣貌秀発なり。学衆の驚嗟するに識る者あるなし。齋主問うていわく。「上人何の者ぞ」と。答えていわく。「名は慧明なり」と。「何寺に住するか」と。答えていわく、「天安(寺)より来る」と。言対の間、倏然として見え、闔席悚愧し、遍筵肅慮す。明祥の実る所、幽応の聞く所と。紫山も観るべく、華台遠からず(中略)京兆尹の孔靈符、事をもつて表聞す。詔してよつて禪房を改めて天安寺となし、もつてそれ瑞を旌す。

中興寺では、路昭皇太后が普賢菩薩像を造り、禪房に二百人の僧を招き齋会を行ったが、天安寺から来たという明慧が姿を現わしては消えるという不思議な現象を何回か起こしたので、寺は天安寺と改名したという。この法義伝と道温伝とほぼ同じ内容が、『宋書』巻九十七・天竺迦毘黎国

伝と『宋書』巻二十七・符瑞志上にもある。天竺迦毘黎国伝には、大明四年に中興寺で齋会を行った時に、天安寺の明慧が突然姿を消すという不思議な現象を起こしたために、天安寺に改名したとある。

世祖の大明四年、中興寺において齋を設く。一異僧有つて、衆これを識るなし。その名を問うや。答えていわく。「名は明慧、天安寺より来る」と。忽然として見えず。天下にこの寺なし。すなわち中興(寺)を改めて天安寺という。

符瑞志上には、孝武帝(在位四五三―四六四)が元凶を討伐する際に新亭寺に滞在し、その後、同寺の禪堂で即位したとある。

文帝の元嘉中、『謠』にいわく、「錢唐にまさに天子を出すべし」と。すなわち錢唐(浙江省杭州)に戍軍(軍隊)を置き、もつてこれを防ぐ。その後、孝武帝は大位に新亭寺の禪堂に即く。「禪」(chan)と「錢」(qian)と音相い近きなり。

これらの記述から、法義を祀るために造られた新亭精舎が、数十年の間に、孝武帝との深い由縁があつて、宋朝で

重視される大寺院へと変容していったことが分かる。

智秀伝によれば、『般若経』などに精通した陝西省長安出身の智秀の講義時には、多くの人々が聴講するほどであったが、建業の治城寺で六十三歳で亡くなった葬送の様子を次のように記す。

天藍の初をもつて治城寺に卒す。春秋六十三。会葬の日、黑白奔赴し、街巷填闐す。士庶酸を含み、荣哀もつて備う⁽¹⁵⁾。

会葬時には多くの人が町を埋め尽くし、悲しみの気持ちを表したとあり、生前中の智秀の人柄を推測することができ。しかし、伝記に「荣哀もつて備う」とあるのは、『論語』子張第十九などに、「喪は哀を致して止む⁽¹⁶⁾」や、「その生くるや荣え、その死するや哀しむ⁽¹⁷⁾」とあるように、人が亡くなった時には、悲しみの誠を尽くすことを、儒教の精神として重視する中国人の氣質を表現しているとも考えられる。

法匱伝には、建業の枳園寺きわんの法階きわん（生没年未詳）に師事した、浙江省出身の沙弥法匱は、入滅前に不思議な現象を起こし、死後、南齊の武帝（在位四八二—四九三）が法要

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察（一）（武藤）

を営んだとある。

その本家は、京師の大市に僑居きやうきよす。その旦、家に還りまた定林（寺）に至り、復び枳園（寺）に還る。後、三処の考覆こうかくに、みな（法）匱来りて中食するを見る。実にこれ一時に三処に赴けるなり。その日、晩に房に還り、臥して奄然えんぜんとして卒す。屍はなほだ香軟にして、手は二指を屈す。衆みなその二果を得たるを悟る。時に沙弥なり。しかも靈迹殊異なり。ついに武帝に聞こゆ。帝親しく臨幸して、ために僧を会して供を設く。文惠・文宣並びに房に至りて頂礼し、葬殮そうらんを管理す。百姓雲のごとく赴き、嚙施重疊す。よつて得る所の利養をもつて、枳園寺の塔を起つ。この歳は、齊の永明七年なり⁽¹⁸⁾。

入滅前の法匱は、昼食時に実家など三か所に姿を同時に現わし、その晩に僧坊で横になって亡くなった。体からは特別な香りがし、指を二本曲げて、上座部仏教の修行階位である第二果を自らが得たことを表現していた。死後、武帝の子である文惠太子と文宣王は、僧房に赴いて葬送を執り行った。葬送には、多くの人から多数の布施が寄せられ、

それを元手に、永明七年（四八九）には栢園寺に仏塔を建立したとある。

僧翼伝には、出身地の秦望（浙江省紹興県）の山に法華精舎を造った僧翼の人の柄と葬送後を次のように記す。

秦望の西山に至り、五軸峯を駢ならべて、耆闍ぎじやの状あるを見、すなわち草を結びて庵となし、法華精舎という。

（中略）（僧）翼、蔬食そしきん澗飲いんすること三十余年。宋の元嘉二十七年をもって卒す。春秋七十なり。碑を山寺に立てて、その遺徳を旌あはす。会稽こうかんの孔道くうだう、文を製つくす。¹⁹⁾

七十歳で亡くなった僧翼の遺徳を顕彰して、法華精舎には、孔道（生没年未詳）が文を製した碑が建立されたところ。

次に、曇鑿・衛思度・法和・僧光・曇徽を中心として、高僧の臨終時の様子や亡くなった姿などを検討する。

曇鑿伝には、六十歳に至ったら、安養国に生まれて阿弥陀仏を観ることを悲願とした、河北省出身の曇鑿の臨終時の様子を次のように記す。

年、耳順じじゆんに登りて、勵行弥々潔し。常に安養に生じて

弥陀を瞻せん観かんせんを願う。（中略）夜に至つて、諸の耆老と共に無常を叙す。言甚だ切至なり。既に夜、各々房に還る。（曇）鑿独り留まりて、廊下を歩して、三更に至る。沙弥僧、願ひ房に還らんを請う。（曇）鑿いわく、「汝、ただ眠れ。すべからくまた来るべからず」と。明旦に至り、弟子慧嚴、常によりて問訊す。

合掌平坐して、口言わざるを見、迫り就いてこれを察すれば、実にすなわち已に卒せり。身体柔軟にして、香潔常に倍す。因つて申のまして殮れんす。春秋七十なり。²⁰⁾

ある晩曇鑿は、長老達と無常について語り合い、夜が更けても僧坊に戻らないので、沙弥の僧（生没年未詳）が戻るよう求めたが、戻らなかつた。翌朝、慧嚴（生没年未詳）が僧坊に挨拶に赴くと、曇鑿は合掌し整然と坐していたが、言葉がなかつた。近づくとも亡くなっており、身体は柔軟で、常に倍ある香氣を発していた。そこで身体を伸ばして納棺したとある。伝記からは、合掌し端坐して七十歳で亡くなった曇鑿の葬送の形式が、火葬であつたのか、土葬であつたのか不明であるが、遺体を寝かして棺に納めたことまでは分かる。

帛遠伝の付伝には、出身地が不明であるが、『道行般若經』二巻を訳出した優婆塞衛思度の臨終の様子を次のように描写している。

その亡日にあたり、清淨澡漱^{きやうじゆ}して經千余言を誦し、しかる後に衣を引きて屍臥し、奄然^{えんぜん}として卒す。

身体を清めて口をすすぎ、經文を誦え、衣を被つて屍のように横になり、たちまち亡くなったという。身体を清めた理由については、幾つかの理由が考えられる。例えば、衛思度が清淨な身体で亡くなりたいという強い思いがあつたのか。あるいは、儒教の五經の一つである『礼記』の喪大記²²に、死者に対して家人が井戸から水を汲み沐浴を行う決まりがあるのを、生前中に自ら行つたなどであるが、伝記からはその真意を確かめることはできない。

当時の僧の中には、『般泥洹經』『仏般泥洹經』などが、

仏、阿難に告ぐ。「牀を施して北首せしめよ。我が背、大いに痛めば臥せんと欲す」と。阿難はすなわち牀を施し、枕を著^つく。仏は右脇を偃^ふして臥し、膝を屈し脚を累ね、臥して無為の道を思ふ。

とあるように、脇を右にして入滅した釈尊の故事に倣つて

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(一)(武藤)

遷化する人がいた。曇徽伝によれば、河南省出身の曇徽は、

晋の太元二十年年をもつて卒す。亡に臨むの日、体に余患なし。上堂して衆と同じく中食し、よりて別を告げ、食し竟^おりて房に還り、右脇して化す。春秋七十三なり。

午前中の食事を終え、弟子に別れを告げた後、部屋で脇を右にして七十三歳で亡くなったとある。同じように僧濟伝には、四十五歳で亡くなった出身地不明の僧濟は、

須臾^{しゆ}にして還りて臥し、顔色更に悦^{よろこ}ばし。よりて傍人にいいていわく。「吾、それ去らん」と。ここにおいて身を転じて右脇し、言氣俱に尽く。春秋四十有五なり。

とある。

また法和伝と僧光伝にみられるように、当時は、臨終時に衣を頭から被つて亡くなるという風習が一部の僧侶の間であつたようである。釈道安(三一二―三三五)と共に訳經を行い、八十歳で亡くなった河南省出身の法和は、

弟子に勅語す。「俗網煩惱にして、苦累一に非ず」

と。すなわち衣服を正し、仏を繞りて礼拝し、還りて本処に坐し、衣をもつて頭を蒙り、奄然として卒す。

時に八十なり。

弟子に別れを告げた後、衣を整えて仏像の周りを巡つて礼拝し、元の場所に戻つて坐ると、衣を頭に被りたちまち亡くなつたという。

出身地は不明であるが、剡（浙江省剡県）の隱岳山で衣を頭に被り端坐したまま百十歳で亡くなつた僧光は、死後、幾つかの不思議な現象を起こしたとある。

（僧）光、つねに入定すれば、すなわち七日起たず。

山に処ること五十三載なり。春秋二百一十歳。晋の太元の末、衣をもつて頭に蒙り、安坐して卒す。衆僧みな「常に入定す」と。七日を過ぐるの後、その起たざるを怪しみ、すなわちともにこれを見るに、顔色常のごとく、ただ鼻中気なし。神の遷ること久しいといえども、しかも形骸は朽ちず。宋の孝建二年に至り郭鴻、剡に任ぜざれ山に入りて礼拝す。試みに如意をもつて胸を撥てば、颯然として風起こり、衣服銷散し、ただ白骨在るのみ。（郭）鴻、大いに愧懼して、

これを室に収め、塼をもつてその外を疊みてこれに泥をぬり、その形像を画く。今に尚存す。

僧光は坐亡したが、人々は、いつもの七日間の坐禪を行っていると思ひ、異変に気づいた時は、顔色は変わらず呼吸をしていなかった。五十九年後に、剡の県令に任ぜられた郭鴻（生没年未詳）が山を訪れた時、遺体は朽ちておらず、如意で胸を払うと風が起こり、衣は消えて骨だけが現われた。郭鴻は反省して骨を石室に収め、瓦を外側に積み重ねて泥を塗り、その形像を描き、それが今も残るといふ。六十年近く遺体が腐らないというのは、近代以降に発達したエンバミングのように、防腐剤を注入しない限り、現実には考えられない。しかし、少なくとも伝記からいえることは、遷化後に僧光の骨と形像が石室に祀られたことである。

以上、帛遠・求那跋陀羅・竺法義・智秀・法匱・僧翼、曇鑿・衛思度・曇徽・僧濟・法和・僧光の臨終時や葬送時の様子などを考察したが、整理すると次の①～④となる。

①当時の高僧の遷化する姿として、少なくとも三種類あることが分かった。第一に曇徽と僧濟のように、脇を右に

して入滅した釈尊の故事に倣う高僧がいた。第二に法和と僧光のように、衣を頭から被って遷化する高僧がいた。第三に曇鑿と僧光のように、正真端坐して遷化する高僧がいた。

⑥曇鑿と僧光は、入滅後に、常に香氣を出すや遺体が腐らなかつたという不思議な現象を起こしていた。これは、彼らが優れた能力の持ち主であったことを示すための、伝記の脚色であると考えられる。

⑦帛遠や竺法義や法匱や僧翼は、遷化後にその遺徳を偲んで、塔や寺や碑が建立されていた。中でも、法義を祀る新亭精舎は、数十年の間に、孝武帝との深い因縁から宋朝で重視される寺院へと変容した。また法匱は沙弥であったが、葬送時には寄せられた布施が多かつたので、枳園寺に塔が建立されていた。

⑧求那跋陀羅や智秀や法匱の葬送時には、多くの人が哀悼の意を表わし、求那跋陀羅や法匱には朝廷の関係者が列席していた。

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(一)(武藤)

第二節 『梁高僧伝』にみられる外国僧と出身地不明の僧の土葬

先学が指摘するように、⁽²⁸⁾古代より中国では「土葬」が主流であり、『梁高僧伝』が収録する漢魏六朝時代の仏教界にも、火葬は中国風ではないという意識が強かつたと思われる。

田中純男氏によれば、⁽²⁹⁾僧伝で火葬の記事が増えるのは、唐(六一八―九〇七)から五代(九〇七―九六〇)にかけての高僧を筆録した『宋高僧伝』であるという。この時代は僧侶に限らず、一般の人々の間にも火葬が増えていったようで、宮崎市定氏の言葉を借りれば、「唐末五代にかけて火葬の流行を見たので、宋初に至っては従来の律を再認識して、火葬禁止の勅を出さなければならなかつた」ようである。

そもそも「葬」という漢字は、『大漢和辞典』⁽³⁰⁾に、「跽ほうと死と一との合字。死人を一、つまり敷物・台に載せ、跽中に置く意を表わす。故に、ほうむる意。古くは、死人を物に載せて原野に行き、草中に置いて厚く草薪をもってこれを蔽つた」とあるように、「葬る」の意である。

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(一)(武藤)

周末秦漢時代の「礼」に関する諸説を集めた『礼記』の壇弓には、

国子高いわく。「葬は蔵おさむるなり。蔵は人の見るを得ざらんことを欲するなり。この故に衣はもつて身を飾るに足り、棺は衣を周らし、槨くわくは棺を周らし、土は槨めくを周らす」。

国子高(生没年未詳)が言うように、古来より中国では、遺体を墓穴の中に隠して、見えなくする土葬が基本であった。

『梁高僧伝』に記載される土葬を行った外国出身の僧は、帛尸梨蜜多羅(生没年未詳)・曇摩蜜多(三五六一四四二)・仏図澄(二三一―三四八)・竺仏調(生没年未詳)・涉公(?―三八〇)の五人である。出身地不明で土葬を行ったのは、杯度(?―四二六?)の一人である。本節では、この六人の臨終時と土葬の様子を考察する。

帛尸梨蜜多羅伝には、建康(江蘇省南京)に初めて密教を伝え、東晋の咸康年間(三三五―三四二)に八十余歳で亡くなった西域出身の帛尸梨蜜多羅の土葬と、その後の祀り方を次のように記している。

(…)蜜(…)、常に石子崗せきしこうの東にありて、頭陀を行ぜり。既に卒して、因りてここに葬る。成帝その風を懐うて、ために刹を塚所に樹つ。後に、関右の沙門ありて京師に來遊し、すなわち塚処において寺を起つ。陳郡の謝琨、その業を賛成して往事を追旌す。よりて高座寺こうざじというなり。

石子崗(南京市郊外)の東で、衣食住に関する貪著の心を捨てる頭陀行を常に実践した帛尸梨蜜多羅は、亡くなるとその地に埋葬された。東晋の第三代の成帝(在位三二五―三四二)は、彼の徳を讃えて墓に仏塔を建立した。その後、関右(陝西省潼関以西)から建康に來た沙門(生没年未詳)が墓に寺を造り、謝琨(生没年未詳)はその寺を高座寺と名づけたとある。帛尸梨蜜多羅の業績を讃えて、彼が土葬された場所には、塔や寺が建立されたことが分かる。

曇摩蜜多伝には、鬪賓(ガンダーラ)出身の曇摩蜜多とうびんが、建康で『五門禪經要用法』などを訳出した。その後、鐘山(江蘇省南京の東北の山)の定林下寺に留錫したが、自然を愛した彼は、本格的な仏道修行の道場を造りた

いと願ひ、鐘山に新寺を建立したとある。

(曇摩) 蜜多、天性凝靖にして、もと山水を愛す。おもえらく「鐘山鎮岳の美は嵩・華にひとしくす」と。

常に(定林)下寺の基構の潤に臨みて低側なるを歎ず。ここにおいて高きに乗じ地を相して、山勢を揆きまつし、元嘉十二年をもつて、石を斬り、木を刊りて(定林)上寺を営建す。土庶風を欽して獻奉稠疊し、禪房殿宇鬱爾うつじとして層構す。ここにおいて息心の衆、万里より來集し、暗誦肅邕しゆくゆうとして風を臨みて化を成す。³³⁾

続いて伝記には、鐘山に本格的な禪房や仏殿を備えた定林上寺を造り、坐禅を求める人々が雲集した。曇摩蜜多の土葬を次のように記している。

元嘉十九年七月六日をもつて(定林)上寺に卒す。春秋八十有七。道俗四衆は行哭して相趨あひおもむぎ、よつて鐘山の宋熙寺の前に葬る。³⁴⁾

八十七歳で亡くなった曇摩蜜多の葬送には、出家者や在家者を問わず多くの人が参列し、遺体は宋熙寺の前に移されて土葬されたとある。伝記からは、住持した定林上寺とは別の場所に遺体が埋葬された理由を述べていないが、自然

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(一)(武藤)

を愛し仏道修行に励んだ彼の一生を鑑みて、鐘山に埋葬されたと推測される。

仏図澄伝には、七十九歳から百十七歳の間、戦乱が続く河北において石氏一族の帰依を受けて教化活動をした、西域出身の仏図澄の土葬について、神異現象を含んで次のように記している。

(石) 虎、悲慟鳴咽し、その必ず逝くことを知り、すなわちために壙あなを鑿うがち墳はかを営む。十二月八日に至り、

鄴ぎょうの宮寺に卒す。この歳は晋の穆帝の永和四年なり。土庶悲哀し、號びて赴き国を傾く。春秋一百一十七なり。よつて臨漳の西の柴陌しはくに窆ほうむる。すなわち

(石) 虎が創る所の塚なり(中略)初め(石) 虎(仏図)澄を殮おさむるに、生時の錫杖および鉢をもつて棺中に内れる。後、再閔ぜんびん位を纂あり棺を開くに、ただ鉢杖のみを得て、また屍を見ず。ある人いわく。(一) 仏図澄が死せる月、人あり、流沙りゅうさにあるを見る。(石) 虎、死せざるを疑いて、棺を開けば屍を見ず。³⁵⁾

仏図澄の大檀越であった後趙の石虎(在位三三三―三四九)は、師の死期が近いことを悟り、あらかじめ墓を掘り

墳丘を造営した。仏図澄は十二月八日に鄴の宮寺で亡くなった。石虎は国を挙げてその死を悼み、自らが造営した柴陌に埋葬した。この時、石虎は師が使用していた杖と鉢を棺の中に納めた。後に、石虎から帝位を奪った冉閔（生没年未詳）が、仏図澄の棺を開くと杖と鉢だけがあり、遺体は見当たらなかった。一説によれば、仏図澄が亡くなった月に、中国西北方の砂漠で見かけた者がおり、石虎は不死であるのかと疑って、棺を開いてみたところ、遺体はなかったとある。伝記では、死後に仏図澄の遺体が消えたことを伝えるが、少なくとも分かる事実は、遺体は納棺されて、あらかじめ用意されていた墓に埋葬されたことである。

仏調伝には、仏図澄に師事して、人々の病氣平癒などをしたインド出身の仏調の臨終時と死後の出来事について、師の仏図澄と同様に神異現象を含んで次のように記している。

（仏）調、後自ら亡するを剋す。（中略）（仏）調いわく「死生は命なり。それ請うべけんや」と。（仏）調すなわち房に還り、衣をもって頭に蒙い、奄然として

卒す。数年後、（仏）調が白衣の弟子八人と西山に入りて木を伐る。忽にして（仏）調が高巖上にあるを見る。衣服鮮明、姿儀暢悦なり。みな驚喜して作礼し「和上、なおおわす」と。（仏）調いわく「われ常にあるのみ」と。具に知旧の可否を問ひ、良久してすなわち去る。八人すなわち事を捨てて家に還り、諸の同法者に向かいて説くに、衆もつてこれを驗するなし。共に塚を發き棺を開くに、また屍を見ず。ただ衣履のみあり。³⁶

自らの死期を予告した仏調は、僧房に戻って端坐し、衣を頭から被ると直ちに亡くなった。数年後、彼の在俗の弟子達が山で木を伐採した時に、仏調の元氣な姿を見て言葉に交わした。弟子らは仕事を投げ出して、家に戻り、仲間に話をしたが誰も確かめようがない。そこで仏調を埋葬した塚をあばいて、棺を開いて見たが遺体は見当たらず、衣と履物だけが残っていたとある。臨終時に衣を頭から被るのは、前節でみた法和と僧光と同じである。

涉公伝には、秘密の呪文によって龍を下ろして雨を降らすことができるために、前秦の苻堅（在位三五七―三八

五)の帰依を受けた西域出身の涉公の土葬時の様子を次のように記している。

(建元)十六年十二月に至り、疾なくして化す。(苻)

堅これを哭してはなはだ慟す。卒後七日、(苻)堅その神異をもつて、試みに棺を開きてこれを観るに、尸骸の所在を見ず。ただ殮被の存するあるのみ。

涉公は病むことなく遷化したので、苻堅は激しく動揺した。苻堅は死後七日経って、涉公が雨を降らすという神変不可思議の高僧であつたので、試しに棺を開いたが遺体はなく、ただ納棺の際に使用した衣だけがあつたとある。

最後に、出身地不明の杯度の土葬を考察する。杯度伝には、木の杯に乗つて川を度り、各地に姿を現わすという不思議な力をもつた、彼の臨終と二度行われた土葬を記している。第一に、広陵(江蘇省揚州)の李氏が住む村人によつて行われた土葬は次のようであつた。

後、李家に還りて、また三十余日を得。清旦たちまちにいう。「一袈裟を得んと欲す」と。中時までに弁へしむ。李すなわち経営して、中(時)に至りて未だ成らず。(杯)度は「暫し出づ」といい、冥に至るも反

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(一)(武藤)

らず。合境異香あるを聞き、これを疑いて怪となし、処々に(杯)度を覓む。すなわち北巖の下にありて、敗れたる袈裟を地に鋪き、これに臥して死せるを見る。頭前脚後にみな蓮華を生ず。華極めて鮮香、一夕にして萎む。邑人ともにこれを殯葬す。数日後、人あり。北より来りいう。「(杯)度が蘆圖を負い、行き

て彭城に向かうを見たり」と。すなわち、ともに棺を開き、ただ靴履を見るのみ。

李氏の家に戻つた杯度は、「袈裟が一枚欲しい」と頼んだ。正午までに完成しなかつたので、杯度は「少し出掛けてくる」と言つたが、夜になつても戻らなかつた。村中によい香りが漂い、何か異変があると思ひ、辺りを探すと北巖の下で、破れた袈裟を地に敷き、その上に杯度が臥して死んでいた。頭と足の近くには、よい香りの蓮華が生えていたが、一晩で萎んだ。村人総出で埋葬を行つたが、数日後、北から来た人が、「蘆の籠を背負つた杯度が、彭城(江蘇省徐州)に向かうのを見た」と言つた。そこで棺を開くと靴だけが残つていたとある。

続いて伝記は、杯度が彭城などに姿を現わして、不思議

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(二)(武藤)

な力を發揮したことを伝え、第二の土葬として覆舟山(江蘇省南京)に埋葬した後、神異現象として姿を現わしたとある。

元嘉三年九月に至り、(斉)諧を辞して京に入る。一万銭の物を留め、(斉)諧に寄せ倩うて齋を営む。ここにおいて別れ去る。行きて赤山湖に至り、病を患いて死す。(斉)諧すなわち齋を営む。並びに屍を接け還りて建業の覆舟山に葬る。(中略)(元嘉)五年三月八日に至り、(杯)度また斉諧の家に来る。呂道慧、聞人但之・杜天期・水丘熙等、並にともに見て、みな大いに驚き、すなわち起ちて礼拝す。(中略)須臾にして門の上に一僧ありて(杯)度を喚ぶ。(杯)度すなわち辞去していう。「貧道はまさに交広の間に向かうべし。また来らざらん」と。斉諧等、押送すること慇懃なり。ここにおいて迹を起つ。頃、世にまたいこう。「時に見る者あり」と。既にしてもにいまだその事を的にせず。故に伝えべきなきなり。

(元嘉三年(四二六)に杯度は、斉諧(生没年未詳)に一万錢相当の品物を預けて、自分のために齋会を営むよう頼ん

で別れた。杯度は、赤山湖で病を得て亡くなった。斉諧は、遺命通り齋会を行い、覆舟山に埋葬したが、二年後に人々の前に姿を現わした。上空から一人の僧が呼ぶ声が聞こえたので、杯度は「これから交州(ベトナム)と広州(広東省)に行くが戻ることはない」と言つて足跡を断つた。伝記には、近頃杯度を見た人がいるが、事実か確認できないので記すことができないとある。

杯度は二度埋葬されたが、一度目の時に墓から遺体が消えるというのは、先の仏図澄や仏調や涉公と同じであり、実際にそのようなことが起こったのかは分からない。しかし、少なくともいえることは、仏図澄と仏調と涉公と杯度の四人は、『梁高僧伝』の中で、神変不可思議な高僧を収録する「神異篇」に記載されているため、その記述も一致していると考えられる。

以上、帛尸梨蜜多羅・曇摩蜜多・仏図澄・竺仏調・涉公の五人の外国僧と、出身地不明の杯度の一人から成る、六人の土葬を考察したが、整理すると次の①②③となる。

①先述したように、筆者が前回考察した外国僧の火葬は三人であったが、今回考察した土葬を行った外国僧は五人

であった。『梁高僧伝』が、全ての高僧の葬送を正確に網羅していると思われないため、この数字のみを比較して論じることは大変危険であるが、古代より土葬が主流であった中国では、外国僧に対しても土葬が一般的に実施されていたと考えられる。『梁高僧伝』には、火葬を行った求那跋摩や羅什の伝記には、「外国の法によりてこれを荼毘す⁴⁰」や、「外国の法により、火をもつて屍を焚く⁴¹」とある。

⑥埋葬された場所や、埋葬地が用意された経緯に注目すれば、帛尸梨蜜多羅と曇摩蜜多是、自らが仏道修行に専念した石子崗や鐘山に関係する寺院が選ばれていた。帛尸梨蜜多羅は、死後その遺徳を偲んで塔や寺が建立されていた。また仏図澄は、臨終が近いことを悟った石虎が、墳丘をあらかじめ造営し、葬送時には国を挙げてその死を悼んでいた。

⑦『梁高僧伝』の神異篇に所収される、仏図澄・仏調・涉公・杯度の四人は、死後に棺を開けると遺体が消えるという、共通の表記であった。これは、彼らが優れた能力の持ち主であったことを示すための、伝記の脚色であると考

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(一)(武藤)

えられる。

結論

以上、本論では、『梁高僧伝』にみられる葬送の形式が不明なものから、臨終時の様子やその後の祀り方について明らかにした。続いて、『梁高僧伝』に記載する外国僧や出身地不明の僧の臨終時や土葬の様子を考察した。この作業によって確認されたことを整理すれば、次の①～④となる。

①当時の高僧の遷化する姿には、少なくとも三種類あったようである。高僧は入滅時に、脇を右にして入滅した釈尊の故事に倣うや、衣を頭から被るや、正真端坐していた。

②葬送の形式が不明でも、帛遠や法義のように、遷化後にその遺徳を偲んで、塔や寺や碑が建立されていた。中でも、法義を祀る新亭精舎は、数十年の間に、孝武帝との深い因縁から宋朝で重視される大寺院へと変容していた。

③古来より土葬が主流であった中国では、外国僧に対しても特別な事情がない限り火葬は実施されなかったよう

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(一)(武藤)

で、土葬が一般的であった。

④『梁高僧伝』の神異篇に所収される、仏図澄・仏調・涉公・杯度の四人は、土葬後に棺を開けると遺体が消えるという、共通の神異現象を含んでいた。これは、優れた能力の持ち主であったことを示すための、伝記の手法であると考えられる。

今回は、紙幅の関係で『梁高僧伝』にみられる外国僧や出身地不明の僧の土葬を中心に考察したため、中国僧の土葬や風葬と対比して論じておらず、また当時の葬送の様子を多角的に考察していない。従って、論究しなかった中国僧の土葬や風葬については、稿を改めて別の機会に論じる予定である。

注

- (1) 拙稿『梁高僧伝』にみられる火葬の一考察(『愛知学
院大学教養部紀要』第五十八巻第四号、二〇一一年三月)。
- (2) 『梁高僧伝』巻第十四(『大正蔵』五〇・四一八c)。な
お、名前を載せる付見の僧は、実際には二四三名である。
- (3) 船山徹「聖者観の二系統」(麥谷邦夫『三教交渉論叢』
京都大学人文科学研究所、二〇〇五年三月)など多数。

- (4) 田中純男氏は、「インド仏教僧の葬法―中国高僧伝にみ
る葬法―」(『アジア遊学』第三八号、二〇〇二年四月)で、
『梁高僧伝』の中で「葬」ないし「火葬」と記すのは、中国
僧二人、外国僧七人と指摘されているが、全ての名前を記
していない。名前を挙げるのは次の通りである。外国僧の
「葬」として、帛梨蜜多羅・仏図澄・竺仏調・涉公の四人、
外国僧の「火葬」として、羅什・求那跋摩・法朗の三人、中
国僧の「火葬」として智嚴・竺道高の二人である。また田中
氏は、「中国高僧伝にみる葬法―中国人僧の場合―」(『密教
学研究』第三五号、二〇〇三年三月)で、『梁高僧伝』に中
国僧の葬法に言及するのは二〇余人であり、その内訳は
「葬」として一人、「殯送」として二人、「火葬」として四
人、「捨身」として一人、火葬に類似する「焼身供養」とし
て九人であるという。しかし、「捨身」の慧安と「火葬」の
智嚴・訶羅竭・法琳・僧生の四人を除いて、高僧の名前を全
て記していない。例えば、「葬」として名前を記すのは、「屍
体を露せと遺命」した慧球・智順の二人であり、それ以外の
九人は、葬った後に建塔した一人、碑を建立した二人、埋葬
した六人といい、「殯送」では、塵勝法師のみであり、「火
葬」に類似した「焼身供養」では、僧周と亡身篇所収の八人
の焼身供養僧であるという。
- (5) 田中純男氏の指摘と重なる部分もあるが、火葬と土葬を
例に挙げれば次の通りである。前者として、求那跋摩・羅

- 什・法朗・智嚴・法琳・道汪・僧生・賢護・訶羅竭・朱士行・普恒・竺道高の十二人である。後者として、帛尸梨蜜多羅・曇摩蜜多・仏図澄・竺仏調・涉公・杯度の六人である。
- (6) 当時の禅觀実修の様子については、拙稿『梁高僧伝』にみられる禅觀実修の動向(『曹洞宗研究員研究紀要』第三四号、二〇〇四年三月)を参照されたい。
- (7) 『梁高僧伝』巻第一(『大正蔵』五〇・三二七b)。同じ内容が、『出三蔵記集』巻第十五(『大正蔵』五五・一〇七b)にもある。
- (8) 『梁高僧伝』巻第三(『大正蔵』五〇・三四五a)。同じ内容が、『出三蔵記集』巻第十四(『大正蔵』五五・一〇六b)にもある。
- (9) 吉川忠夫「日中無影」(吉川忠夫『中国古道教史研究』一七五―二六頁、同朋舎出版、一九九二年二月)。
- (10) 『梁高僧伝』巻第四(『大正蔵』五〇・三五〇c―三五一a)。
- (11) 吉川忠夫・船山徹訳『高僧伝』(二)(九五―九六頁、岩波書店、二〇〇九年十一月)。
- (12) 『梁高僧伝』巻第七(『大正蔵』五〇・三七二c―三七三a)。
- (13) 『宋書』卷九十七・天竺迦毘黎国伝。また、『魏書』一一四・釈老志には類似した話として、七年後に北魏の頭祖献文帝(在位四六五―四七一)が即位し、天安を年号とすること

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(一)(武藤)

- となる予兆とする。
- (14) 『宋書』卷二十七・符瑞志上。
- (15) 『梁高僧伝』巻第八(『大正蔵』五〇・三八一a)。
- (16) 『論語』子張第十九(新釈漢文大系第一卷、四二二頁、明治書院、一九六〇年)。
- (17) 『論語』子張第十九(新釈漢文大系第一卷、四三〇頁、明治書院、一九六〇年)。
- (18) 『梁高僧伝』巻第十(『大正蔵』五〇・三九三b―c)。
- (19) 『梁高僧伝』巻第十三(『大正蔵』五〇・四一〇c)。
- (20) 『梁高僧伝』巻第七(『大正蔵』五〇・三七〇a)。
- (21) 『梁高僧伝』巻第一(『大正蔵』五〇・三二七c)。同じ内容が、『出三蔵記集』巻第十五(『大正蔵』五五・一〇七c)にもある。
- (22) 『礼記』喪大記(中巻・新釈漢文大系第二八卷、六六九―六七〇頁、明治書院、一九七七年)には、「管人は汲むに繡を説かずしてこれを屈め、階を尽くして堂に升らずして御者に授く。御者入りて浴す」とある。
- (23) 『仏般泥洹経』卷下(『大正蔵』一・一六八c)。同じ内容が、『般泥洹経』(『大正蔵』一・一八四b)にもある。
- (24) 『梁高僧伝』巻第五(『大正蔵』五〇・三五六b)。
- (25) 『梁高僧伝』巻第五(『大正蔵』五〇・三六二b)。
- (26) 『梁高僧伝』巻第五(『大正蔵』五〇・三五四a)。
- (27) 『梁高僧伝』巻第十一(『大正蔵』五〇・三九五c)。

『梁高僧伝』にみられる土葬の一考察(一)(武藤)

- (28) 道端良秀『仏教と儒教』(九一八三頁、第三文明社、一九七六年十一月)。宮崎市定『宮崎市定全集』(第十七卷、一九八一―二二頁、岩波書店、一九九三年六月)など。
- (29) 田中純男『僧伝・付法伝等におけるインド仏教僧の葬法』、『小野塚幾澄古稀記念論文集・空海の思想と文化』下巻、ノンブル社、二〇〇四年一月。
- (30) 諸橋轍次『大漢和辞典』(巻九、八〇三頁、大修館書店、一九六七年八月)。
- (31) 竹内昭夫『礼記』(上巻・新釈漢文大系第二七巻、一二六頁、明治書院、一九七二年四月)。
- (32) 『梁高僧伝』巻第一(『大正蔵』五〇・三二八a)。
- (33) 『梁高僧伝』巻第三(『大正蔵』五〇・三四三a)。
- (34) 『梁高僧伝』巻第三(『大正蔵』五〇・三四三a)。同じ内容が、『出三蔵記集』巻第十四(『大正蔵』五五・一〇五b)にもある。
- (35) 『梁高僧伝』巻第九(『大正蔵』五〇・三八六c)。
- (36) 『梁高僧伝』巻第九(『大正蔵』五〇・三八八a)。
- (37) 『梁高僧伝』巻第十(『大正蔵』五〇・三八九c)。
- (38) 『梁高僧伝』巻第十(『大正蔵』五〇・三九〇c)。
- (39) 『梁高僧伝』巻第十(『大正蔵』五〇・三九二a―b)。
- (40) 『梁高僧伝』巻第三(『大正蔵』五〇・三四一b)。
- (41) 『梁高僧伝』巻第二(『大正蔵』五〇・三三三a)。